

実現しましょう!



「脱原発宣言」を提案するグリーンコープ共同代表理事の田中裕子さん

2011年9月19日、「『六ヶ所再処理工場』に反対し放射能汚染を阻止する全国ネットワーク（以下、^{*}阻止ネット）」主催による「ストップ再処理2011 脱原発宣言」集会在東京で開催されました。東京電力福島第一原子力発電所で起こったような悲惨な事故を二度と繰り返さないために、「六ヶ所再処理工場」反対を継続させながら「脱原発」の方針を大きく掲げて活動していくことを確認しました。

集会参加者はその日の午後、東京の明治公園で開催された「さようなら原発5万人集会」へ合流し、集会後には都内をパレードしました。

2つの集会とパレードのようすを報告します。

一人ひとりの意志で 原発を止めよう

3月11日の東日本大震災に伴う原子力発電所の事故。放射能汚染により、約11万人の原発周辺の人々が生活の基盤を奪われ、今もさらに多くの人が日々被曝の恐怖に晒されています。さまざまな食品から放射性物質が検出され、加えて風評被害もあるため復興への歩みもままならない状態です。集会では、被災地にあるあいコープみやぎ理事長の吉武洋子さんが開会の挨拶をしました。「被災地は、まだ震災の被害から立ち直っていません。地震や津波は人の手では止められないけれど、原発は止められません。一人ひとりが明確な意志を持って原発を止めましょう」と被災地の厳しい現状から脱原発を呼びかけました。

参加者は約650人。原子力資料情報室の澤井正子さんによる講演や、生協組合員、メーカー・生産者などによるリレートークが行われました。各地で脱原発に取り組んでいるようすや原発事故で苦しい状況に置かれているようすが報告されました。



脱原発を実現するために、たくさんの声をグリーンコープかごしま生協理事長 川原ひろみさん

経営する水産加工工場が被災しました。復興が思うように進まず苦しんでいる人たちがたくさんいます。震災後は私も気持ちが落ち込むこともあり。地震と津波は天災ですが、その後の放射能問題などへの対応は人災。このままでは食べものが手に入らなくなるかもしれないというところまで来ています。ぜひ、被災地に来て感じてください。粘り強く一緒に原発反対の運動をしていきましょう。



被災地に来て 脱原発を実感して 高橋徳治商店(宮城県) 社長 高橋英雄さん

「ストップ再処理2011 脱原発宣言」集会

「六ヶ所再処理工場」に反対し放射能汚染を阻止する全国ネットワーク 脱原発宣言 脱原発を実現し、エネルギー政策を転換しよう!

私たち、「六ヶ所再処理工場」に反対し放射能汚染を阻止する全国ネットワーク(阻止ネット)は、2007年7月28日の「キックオフ集会」にて、次の呼びかけ文を採択して活動を始めました。

再処理工場の問題点の前半部分は省略～

放射能汚染は、自然環境とあらゆる生物に深刻な打撃を与えます。その脅威と恐怖は現地の人びとだけの問題ではなく、豊かな農畜水産物の恵みをうけてきた私たち全体の問題です。私たちは、放射能汚染という負の遺産を将来に残さず、これからも安心して国産の農産物、畜産物、海産物を食べ続けたいのです。

すでに沿岸の自治体では、海への放射能放出を規制する法律制定を求める請願を採択するなどの動きが出ており、全国各地で中止を求めるさまざまな取り組みが展開されていますが、私たちもまた、「六ヶ所再処理工場」による放射能汚染を阻止することを目的とし、生産者と連携し、本格稼働の中止を強く求めていきます。この目的を実現させるために、

- 1) 私たちは、放射能汚染による風評被害や実被害を発生させないように行動する決意を表明します。
- 2) 私たちは、自主的に放射能汚染を監視し、自然環境や第一次産業を守り育てることを宣言します。
- 3) 私たちは、生産者と連携し、産地と消費者をつなげ続けていくことを宣言します。
- 4) 私たちは、「六ヶ所再処理工場」による空と海の放射能汚染に反対し、豊かな自然環境と生命と食べ物を守る運動の大きなうねりを、ともに創ることを呼びかけます。

*資料「六ヶ所再処理工場」に反対し放射能汚染を阻止する全国ネットワーク これまでの活動 参照

私たちは、放射能汚染を防ぐためには、原発を含む核燃料サイクル全体の問題を捉えなければならぬと考えていましたが、六ヶ所再処理工場が運転されたなら原発とは桁違いの放射能を環境に放出することを知り、目前に迫る六ヶ所再処理工場の本格稼働を止めさせることを最優先課題として、キックオフから4年間、共に活動してきました。

しかし、3月11日の東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により深刻な放射能汚染が起こってしまい、これまでの活動のままで放射能汚染を阻止できないことが明白になりました。福島原発周辺の11万という人々の生活基盤が根こそぎ奪われ、さらに多くの人が被曝の恐怖に日々晒されながら暮らしています。野菜、原乳、魚など食品からも放射性物質が検出され、東北をはじめ広範囲の多くの生産者が風評被害と実被害に苦しんでいます。

キックオフ集会で確認した、放射能汚染の「脅威と恐怖は現地の人びとだけの問題ではなく、豊かな農畜水産物の恵みをうけてきた私たち全体の問題」が、まさに現実になってしまったのです。

私たちは痛恨の思いで放射能汚染の現実を見据え、このような悲惨な原発事故を絶対に二度と繰り返さないために、「脱原発」を阻止ネットの活動目的としてはっきりと掲げます。地震・津波による危険性も訴えて「ストップ再処理」を継続し、再生可能エネルギーへの転換を図ること、原発と核燃料サイクルは不要であることを、明確に打ち出します。

あまりにも多くの犠牲が払われましたが、今ようやく、脱原発とエネルギー政策の転換を求める声が大きくなっている。このうねりをさらに大きく確かなものにし脱原発を実現するために、多くの市民、市民団体、そして生産者と連帯・協力していきます。再処理工場と全ての原発を止めるまで、共に活動していきましょう。

2011年9月19日 「ストップ再処理2011 脱原発宣言」集会

グリーンコープの脱原発政策に基づき、県内に2基の原発があるグリーンコープかごしま生協でも反対運動に取り組んでいます。今回の原発事故を受けて、九州電力が川内原発3号機増設計画の手続きを当面見あ

わせると表明し、計画は頓挫しています。かごしまでは増設計画の白紙撤回を申し入れています。現在、川内原発1号機は安全評価のストレステストのため、2号機は定期検査のため、停止中。しかし、県は節電を呼びかけるわけでもなく、県民は普通に生活しています。9月11日に行った「さよなら原発県民集会」では、人口の1割にあたる17万人の署名を集めることを確認しました。今日も桜島は噴火しています。火山性地震が多発するところに原発があるという危機感を持って運動に取り組んでいきます。

今集会の目的である「阻止ネット脱原発宣言」を、グリーンコープ共同代表

「脱原発」の思いをみんなで大きなカタチにしましょう!

今この瞬間も、多くの人が放射能汚染の恐怖に悩み苦しんでいます。二度とこのようなことが繰り返されないよう、「脱原発」の思いを結集し、もっともっと広げていきましょう。グリーンコープもこの集会の呼びかけ人となっています。

サヨナラからはじまるミライ～GOOD BYE NUKES～

「さよなら原発! 福岡1万人集会」

日時・11月13日(日) 10:00～開場

※さよなら原発!お祭り広場開会。ステージ、各種出店があります

場所・福岡市舞鶴公園 (福岡市中央区城内1)

【内容】 13:00 さよなら原発!大集会 14:00 パレード開始 15:00 天神・九電前・大宣伝行動

主催 九州・沖縄・韓国に住む市民でつくる さよなら原発!福岡1万人集会 実行委員会

生活を問い直し、「脱原発」を

さようなら原発5万人集会

阻止ネットの集会後、参加者は明治公園に移動し、「さようなら原発5万人集会」に合流しました。会場となった明治公園は、さまざまなのぼりを掲げた市民団体・生産者・政治団体・労働組合・市民などで周辺道路にまで人があふれ、参加者は6万人に膨れ上がりました。

集会の呼びかけ人である鎌田慧さん、大江健三郎さん、落合恵子さん、山本太郎さんをはじめ、ゲストとしてドイツから国際的な環境団体F.O.Eドイツ代表のフーベルト・ヴァイガーさん、被災地福島から、ハイロ（廃炉）アクション福島原発のメンバーも駆けつけて、アピールを行いました。中でも落合恵子さんによる「想像してください。放射能のないで」と泣き叫ぶ子どもたちが今この日本にいないことを。放射性廃棄物処理することができないのに、原子力（原発）を持つ罪深さを」という呼びかけは、会場

の多くの人の共感を呼びました。最後は会場全体で「原発反対！子どもを守れ！」と声をあげ、その後、3つのコースに分かれて都内をパレードしました。延々と続くパレードでは、参加者は「原発いらない」などの横断幕やプラカードを手に、「子どもたちの生命を守ろう」「原発なんていらぬ」とシュプレヒコールをあげながら、力強くアピールしました。信号待ちの車の中からは小さい子どもだけでなく、お父さんが手を振る姿も見られました。これまで脱原発のパレードに何度も参加しているグリーンコープのメンバーが「今回ほど手応えを感じたことはない」と話すと、市民の中にも関心の高さがうかがえ、今後の「脱原発」運動に力をもらった行動となりました。

※3 Friends of the Earth. NGO. 地球規模での環境問題に取り組む国際環境

講演 脱原発社会への道すじ

「福島第一原発事故から私たちは何を学ぶのか」

原子力資料情報室 澤井正子さん



澤井正子さん

原子力資料情報室

理学博士・物理学者(核化学)の故高木仁三郎さんらにより、原子力に依存しない「脱原発」社会をめざしてつくられた民間のシンクタンク。NPO法人。原子力業界から独立した立場で、調査・研究・提言を行っている

終息は誰にも分からない

1979年、アメリカのスリーマイル島の原発事故でも炉心熔融(メルトダウン)が起こった。かろうじて熔融物が圧力容器内にあることが分かったのが事故の10年後。未だに解体・撤去もできず、「安全貯蔵中」「監視中」の状態。今回の原発事故でも炉心熔融を起こしている。現時点では、溶けた核燃料がどこにあるのか、安定的冷却状態になったとしてもこの事故がいつ終息するのかは、誰にも分からない。

再生可能なエネルギーへ

原発推進には、互いに利益を得てきた政治家・企業・研究者の集団、一部マスコミや司法などまで含む、「原子力村」と揶揄的に呼ばれるような組織的な問題がある。しかし、最も大きな問題は、圧倒的多数の市民と社会が無関心だったことである。

この夏、日本にある原発54基のうち、定期点検などで3分の2が停止しても電力は不足せず、昨年より15%削減を達成した。LED(発光ダイオード)などの活用でさらに省エネできる余地はある。再生可能エネルギーに向かうしかない。一方で、一人ひとりが今までのライフスタイルそのものを問い直す必要がある。

原発は「工」!

電気を大量に生み出す方法は水力・火力・原子力の3つ。発電機につながるタービンを動かす動力が、水か蒸気かのどちらかで、その蒸気を作る燃料が石油・石炭・天然ガスか、ウランかの違い。いわば「ヤカンで湯をわかす」ようなことなのに、原子力発電は広島・長崎で人々が浴びた熱線と同じ放射性物質・死の灰を生み出してしまっている。

CO₂の排出量という点では、石炭を使った火力発電は原子力の2・5倍強を排出する。しかし、原子力発電も再生可能エネルギーである風力発電の9〜17倍のCO₂を排出している。効率という点でも、原子力発電所では100万kWを発電するために、200万kW分(全体の3分の2)の熱を海に捨てる構造になっており、原発はエコとは言えない。

3月11日以降の2カ月間に余震としてマグニチュード6以上の大規模地震が200回以上も起こっている。地震が多発する日本だからこそ高まる危険性と、さらには放射性廃棄物の処分という大きな課題もある。

避けられる限り避ける

今、新幹線で福島を通過する際には放射線測定器の線量が上がると。六ヶ所村の再処理工場横で通常0.02〜0.05マイクロシーベル

トだが、3月11日以降の東京ではほぼこの2倍の値になっている。

人間は、原発事故がなくても自然界から常に等しく1ミリシーベルトの放射線を浴びている。体の全細胞が1年間に1回ずつ放射線照射を受けるのに相当する値である。1ミリシーベルトなら人間の体は修復できると言われているが、量が増えるに従って、がん細胞が増えてしまったり、遺伝子情報を間違えて伝えるということが起こる。「〇〇シーベルト以下なら安全」と言える科学的根拠は何もない。避けられる被曝は可能な限り避けるべき。

半減期を過ぎても影響は残る

今回の原発事故後すぐに問題になったのが、放射性ヨウ素。気体となって飛散しやすく半減期が短いので放射線をどんどん出すためだ。放射性物質でないヨウ素は、子どもたちの成長に欠かせない甲状腺ホルモンを作るために必要なもの。しかし、体は安全なヨウ素

内部被曝は直接DNAを傷つける

飲食、吸引などで放射性物質が一旦体内に入ってしまうと、そこで放射線を発し続ける。何もささざるものがないため、直接DNAを傷つけることになる。これが内部被曝だ。外部被曝も問題だが、食品への放射性汚染が広がり続けられ、内部被曝はより深刻な問題となる。

事故と被曝の関係は、10